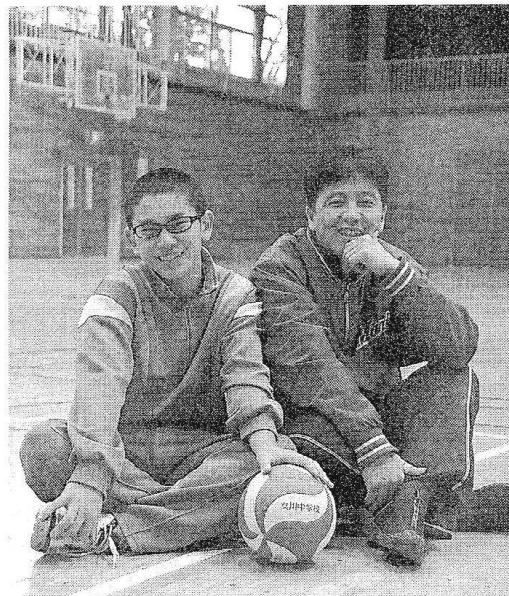


先生と語る 私たちの希望

心配ない俺たちが変える

■木村さん

中学1年の最初の社会科の授業から、みんなで津波対策を考えてきました。昨年11月に町長や町議会の人たちにそれを発表した。絆をつくる。記録に残す。高台に避難所をつくる。三つの対策を



小野智美撮影

2人はバレー部の部長と顧問。木村さん(左)は津波で母方の祖母を亡くし、仮設住宅で暮らす。2年生で生徒会長。女川一中は津波を免れ、離島・出島の女川第一中学校が一中で再開。二中の保護者たちは町中の仮設住宅にとまり、新年度に統合して女川中になる。佐藤さん(右)は国語教師。震災後から全校生徒の俳句作りを指導する。津波で小学6年の次女を亡くした。

発表後、質問が出た。質問の内容は忘れたんですけど、自分の答えは覚えてます。

「これから俺たちが変えていくので、みなさんは心配しないで、温かく見守ってください」

「絶対に期待に答えてやる」といふ気持ちを込めて答えると、会

宮城県女川町立女川第一中学校

木村 竣哉さん(14)

佐藤 敏郎先生(49)

場に拍手がわきあがった。あの拍手には何が込められていたのか。三つの対策は全部、表現させたの21の浜すべての津波到達点に石碑を建てたい。21基の建立に1千万円はかかる。いま、このための100円募金を始めています。日本の人口の千分の1の人たちの協力を集められればできる。あながち遠い未来の話ではなく、すごい近い未来の話ではないかな。高校生になった先輩たちと一緒に活動する場面があるかもしれない。先輩たちもまきこみたい。この活動は、大げさかもしれないけど、死ぬまで続ける。俺の夢は作家なんですけど、津波をテーマに本を書いていこうかな。

あの日、坂の上から、ちょっとだけ波が見えた。音も聞こえなかった。でも音は吹き飛んで、映像だけが残っている。まだ覚えてますね。その中に、ばあちゃんが住んでいた家がちらっと見えた。

2月15日、全校生徒で防災集会を開きました。テーマは「3・11と向き合う」です。もうすぐ、あの日が来る。「震災」とか「津波」とか聞いただけで、ドキドキする人もいます。俺もそうだった。でも、その言葉を一生避けて通るわけにもいかない。3月11日は毎年くるんだから——と話しました。集会の後、備蓄食糧の入れ替えの意味でお菓子を食べながら一言メッセージを書いた。

「なにに3・11」というものですが、俳句より長くはだめ。呼びかけでもいい。自分しか分からない言葉でもいい。無理に書かなくてもいいよ。そう伝えました。3・11の前にメディアが沸く。子どもたちが情報にさらされる前にやらなければ、と考えました。俺の一言は「3・11私のスタート地点」。あの日から避難所生活が始まり、すべて始まった。スタートには前向きな響きがある。でも、本当の悲しみも、あの日から始まった。そんな話もしました。「流れ星を二つ見た3・11」と書いた子もいた。あの晩はみんな体育館に泊まりましたからね。ふざけて書く子もいた。書かない子もいた。それはそれでいいんです。思いは一つじゃない。「思いたい」という思いも大事。向き合う気持ちは一人ひとり違うことを大切にしてほしい。

言葉で探そうあの日

の日の輪郭

(聞き手・小野智美)